

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



現在の東京都と埼玉県に跨る武蔵野の地は、古代には照葉樹林の広がる土地であったが、焼畑耕作などにより広大なススキ野原となったといわれる。

『万葉集』以来、武蔵野は歌枕としてしばしば秋草とともに詠まれるようになり、江戸時代には『新古今和歌集』の和歌をもとにした「武蔵野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」の俗謡が広く人口に膾炙する。

秋草のほかに描かれるのは富士山と月のみと、うシンプルな構成の本作は、そのような背景のもとに制作されたもので、詩歌と美術との密接な関係を端的に示している。日本の風景表現では、実景との関わりよりもむしろ土地にまつわるイメージの蓄積と投影こそが、その基層を成していたのである。

(主任学芸員 福士雄也)

No.
110
2013年度 | 夏 |

漱石と富士山

館長 芳賀 徹

夏目漱石の傑作『三四郎』（明治四十一年）のはじめのほうに、次の有名な一節がある。

主人公の三四郎はいま数えて二十三歳。九州熊本（旧制）高校を卒業して、この秋から東京帝大の文学部に入学するため、はじめて上京しようとしている。夕べは名古屋に一泊して女難の事件に遭いそうになったが、今日は無事に長旅最後の東海道の中である。

筋向かいの席の中年男とさきほどからぼつりぼつりと話を交わしている。面長でひげの濃い神主じみた男で、うまいものに手が出なくてかわりに鼻が伸びてゆく豚の話とか、レオナルド・ダ・ヴィンチの砒素実験の話とか、妙なことばかり語っては三四郎を驚かせている。浜松では停車

時間が長いので西洋人乗客がホームに下りて散歩していると、窓からこれを眺めて男は「どうも西洋人は美しいですね」と言った。さらにつづけて、次のようなとんでもないことを言いだして、三四郎の度胆を抜く。

「御互いは憐れだなあ。こんな顔をして、こんなに弱つてゐては、いくら日露戦争に勝つて、一等国になつても駄目ですね。（中略）あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでせう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。所が其富士山は天然自然に昔からあったものなんだから仕方がない。我々が拵えたものぢやない。」

三四郎は相手（これが「偉大なる暗闇」一高教授広田先生だったとは

後でわかる）が日本人ではないような気がしたと言う。にやにやしなからこんなことを言われたのでは、百

余年後のいまの日本の若者でも唾然とし、腹を立てたりさえするかもしれない。漱石の書くことが、広田先生の言うことが、あまりにも凶星だからだ。この歴史以前からの天然自然の一火山を、ロシヤに勝つた「一等国」の象徴のように内外に言いふらし、手前味噌の種にするのは、たしかに見苦しい。恥ずかしい。

学生たるもの、知識人たらんとするものは、時流に迎合してはならない、大衆の愛国心におもねってはならない、冷めていよ、世界を知れ、と広田先生は富士山をだしにして田舎出の若者にさとしたのであった。でも日本も発展するでしょうと弁護

する三四郎に、先生は「亡びるね」とまで言い切った。ここまで言われて、さすがに学生三四郎は、熊本よりも東京よりも日本よりも「頭の中」こそが広いことに目ざめて、愕然とするのである。

この富士山がユネスコによって世界の文化遺産に登録されることになった。ただの自然遺産ではない。万葉の山部赤人以来幾十世代の富士称揚の詩歌、絵画、物語、そしてラフガディオ・ハーンやポール・クロードルの名文にまで思いを馳せれば、当然自明のことである。いままら浮かれることはない。私たちは漱石先生の教える皮肉なクールさを守つて、富士山と国内外の名山霊山との比較文化史を試みてゆこう。私たちの県立美術館は十分にその研究機関の一翼たりうるはずである。



車中の広田先生（名取春仙「三四郎」連載挿絵、『朝日新聞』明治41年9月5日）

世界遺産登録記念（仮） 富士山の絵画

2013年9月7日（土）～10月20日（日）

富士山の世界文化遺産への登録が、いよいよ目前に迫ってきました。富士山がいにしえより信仰の対象とされ、様々な芸術活動の源泉となってきたことは周知のとおりですが、この機会にあらためてその文化的意義を示すために、中世から近代にいたる富士山の絵画を一堂に集めた展覧会を開催いたします。

平成二十五年六月下旬に想定される世界遺産への登録にあたっては、富士山の山体そのものとあわせて、その周囲にある神社、登山道、湖沼な

ど数多くの構成資産が選定されています。これら構成資産は、富士山と一体となつてその価値を構成し、文化的景観を創出している点に大きな意義が認められます。地理的には富士山からやや離れた場所にある「三保松原」や、「白糸ノ滝」が構成資産（候補）として選定されているのはこのためです。とりわけ、芸術の源泉という意味で、両者の果たしている役割は非常に大きいといえるでしょう。

本展ではこの点に注目し、富士山信仰はもとより、県内の構成資産（候補）として重要な位置を占める「三保松原」「白糸ノ滝」が富士山と組み合わされることで、どのような景観を形作ってきたのかについても検証します。このことは、両者の構成資産としての高い価値を示すことにもなるでしょう。

「東西の風景表現」を主要な活動テーマとしてきた当館は、これまで富士山をモチーフとした作品についても地道に収集を続けてきました。近年では、はごろもフーズ（株）より《富士三保松原図屏風》をご寄贈いただき

き、貴重な室町期の屏風も加わりました。こうしたコレクションを存分に生かしつつ、本展の構成に必要な不可欠な作品については他所からもお借りし、世界遺産の登録年にふさわしい展覧会を目指します。

なお、富士山の世界遺産登録は、静岡・山梨の両県が国をはじめ関係諸機関と手を携えて推進してきたものです。諸般の事情により本年は叶いませんでしたが、遠くない時期にあらためて両県合同での富士山展開催も計画しているところです。あわせてご期待ください。

この原稿の執筆時にはまだ「（仮）」を取ることはできませんが、本誌の発行時には晴れて世界遺産登録されていることを祈りつつ…。

（主任学芸員 福士雄也）



元信印《富士参詣曼荼羅図》 室町時代（16世紀）
富士山本宮浅間大社 重要文化財



《富士三保松原図屏風》 室町時代（16世紀） 静岡県立美術館（はごろもフーズ（株）寄贈）



平成24年度 新収蔵品・寄贈作品の紹介

一九八六年（昭和六十一年）の開館以来、「東西の風景画」を中心に収集活動が続けてきたコレクションは、ご寄贈いただいた作品を含め、二五〇〇点余を数えるまでになりました。

平成二十四年度は、二件の作品を購入し、十七点の寄贈をいただきました。ここでは、それぞれの作品について、各ジャンル担当の学芸員より、その特徴と見どころをご紹介します。なお、新収蔵品は、七月十三日（土）～八月二十五日（日）の「新収蔵品展」で展示いたします。皆様のご観覧をお待ちいたしております。

【日本画】

ご寄贈により、三点の掛幅がコレクションに加わりました。横山大観《春園の月》は、画面横幅が一四〇cm近くにもなる大幅です。銀泥の月に



横山大観《春園の月》昭和12～14年（1937～39年）

照らされて古木の風格ある姿が浮かび上がりますが、ふつふつと花を開く白梅は可憐で、その馥郁とした香りが宵闇を濃密な生命の気配で満たすかのようです。大観ならではの気分の大きさを感じられる見事な一品。展示室でその迫力を是非体感していただきたいと思えます。

安田靉彦による二点は昭和戦前期の作と考えられるもので、靉彦らしい

い線描の美しさを味わうことができます。《雅扇》は、流麗で的確な描線と控え目な着彩により、中国風俗の女性の艶やかで気品あるたたずまいを描き出します。《不動明王像》では、法隆寺金堂壁画などの古絵画から学んだ張りのある力強い墨線が、尊像の充実した体軀を形作り、金泥や墨のほかしの対比の中でその姿を際立たせています。いずれも靉彦の確かな技量と高潔な画の魅力が光る作品です。

（主任学芸員 石上充代）

【日本洋画】

日本洋画は、佐分眞の油彩画一点を購入、前田守一の版画作品十二点をご寄贈いただきました。



前田守一《作品CB-1「暗愚」》1959年（昭和34年）



佐分 眞《雪のグリユンデルワルト》1927年（昭和2年）

佐分の作品は、『佐分眞遺作集』に収録された作品で、作品に付された小寺健吉の解説によれば、滞仏時の一九二七年十一月月上旬に、小寺を含む四名で旅行したスイス・グリユンデルワルトの風景であることが分かります。キュビズム的な建物の処理と、後の重厚な色彩感覚を予感させるモノクロームに近い色使いが印象的な作品です。

また前田守一の作品は、初期から晩年に至る典型的な作風を示す作品です。とりわけ、《作品CB-1「暗愚」》《作品CB-2「木偶」》は、彼がモダアート協会展で新人賞を受賞した作品であり、彼の出世作ですが、こ

れまでほとんど紹介されていません。こうした作品は、日本版画史において重要な役割を果たしたものであり、当館に収蔵されることで、日本及び静岡の創作版画史を語る上で重要な位置を占めることは間違いありません。

(上席学芸員 泰井 良)

【西洋】

西洋画のジャンルでは、ジャン・バルボー(一七二一—一七六二)の書籍版画集『最も美しき古代ローマのモニュメント』を購入しました。バルボーはフランス生まれの画家・版画家。ローマに活動の場を求め、当時のフランス・アカデミー館長の知



ジャン・バルボー『最も美しき古代ローマのモニュメント』1761年

遇を得てアカデミー寄宿生となりますが、借金や結婚問題などを起こして退去させられるという、破天荒な人物でも知られます。十八世紀は、古代遺跡の発掘などによって古代ギリシア・ローマ美術への関心が高まり、考古学的な著作や作品が数多く制作されるとともに、実際の風景に基づく景観版画が一般的になってきた時期です。本書はそうした典型作の一つ。当時のローマに存在した古代の名所旧跡と古代の絵画・彫刻を取り上げ、一二八点の図版とその解説を付した大著は、見て楽しく、読んで面白い、バルボーのローマに寄せる愛がひしひしと伝わる作品です。

(上席学芸員 南美幸)

【現代】

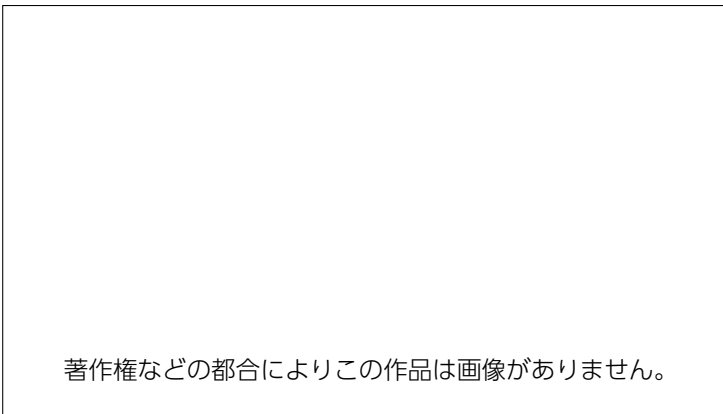
現代ジャンルでは二点をご寄贈いただきました。ジュリアン・オピの『日本八景より』国道三百号線から眺める富士山と雛菊は、歌川広重にちなん

だシリーズのうちの一点です。GPSガイド付きの車で、富士山周辺の道作家みずから旅し、現地で写真に収めたイメージや、録音した音を素材にして制作されています。日常生活の中にある何気ない動きを、ゆるやかなスピードで、現代的なコンピュータアニメーションの技術を用いて描き出しています。

菅井 汲の『SPACE-THE SIDE』は、横長の画面の中に複数の造形的

要素が組み合わせられた一九八〇年代半ばの版画作品です。幾何学的な造形単位の配置が行われる一方で、斜め方向の運動性、空間の暗示、色面処理の変化の点で、一九八二年以降の菅井の油彩画に通じる要素を色濃く持っています。スポンジでたたくなどして塗られた不均質な色面、絵の具の素材感や筆触を生かした風合いを見せています。

(上席学芸員 川谷承子)



ジュリアン・オピ『日本八景より』国道三百号線から眺める富士山と雛菊 2007年



菅井 汲『SPACE-THE SIDE』1984年(昭和59年)

川村清雄 《天の石屋戸の図》の発見

あめ いわや と
 川村清雄 《天の石屋戸の図》の発見
 敬 村上 敬
 敬 村上 敬

昨年度末、東京都江戸東京博物館と当館とで開催された共同企画展「維新の洋画家川村清雄」。この静岡展が開幕して一息ついた二月のある日、埼玉県在住の浅子宏さんから「今まで知られていなかった川村清雄作品が掲載されている雑誌を発見した」との情報が寄せられた。

その雑誌の名は『日本一』。東京・神楽坂の南北社が大正時代に発行していた総合雑誌である（注1）。浅子さんは、この雑誌の二巻一号（大正五年一月一日発行）「図1」の口絵として清雄の作品が掲載されているのを発見されたのであった「図2」。

問題の口絵は三色版。画面寸法は縦が十五・八、横が二〇・三センチで、天の石屋戸神話が描かれている（注2）。同号には、詳しいモチーフ解説記事も載っている（注3）。これを手引きに作品を見てみよう。

画面右手前で目を引く踊る女神は天宇受売命。髪に真折葛を挿し、手には笹の枝を持つ。神懸かりして乳房をあらわにし、足を踏みならしている。石屋戸に籠もられた天照大神を呼び戻すべく集められた常世の長鳴鳥たちもいる。



図1



図2

この天宇受売命の踊りによって八百万の神が一齐に笑い高天原がどよめく。これを気に掛けた天照

大神は石屋戸を開け、外の様子を窺う。「なぜこのように踊り笑っているのか」。

これに答うるに天児屋命と布刀玉命「あなたさまより立派な神がいらっしゃいますので喜び笑って歌舞をしているのです」。そして二神は櫛に掛けた鏡をさっと差し出すのだが、清雄が描いたのはまさにこの瞬間である（ただしここでは櫛から外した鏡を差し出すように描かれている）。

やがて、鏡に映ったみずからのお姿をよく見るために石屋戸から天照大神が身を乗り出すだろう。その手をとって外に引き出すべく待機しているのが天手力男神。画面左手前に控える半裸の男神である。

さて、そもそもこの作品が口絵に取り上げられたいきさつはいかなるものであったろう。むろん、正月号ということであらためて国家創業に思いを馳せる趣旨ではある。しかし、本図はどうか懸賞クイズのために描かれたものらしい。そして今回発見されたのはその結果発表の号であった（注4）。

われわれは解答を先に見てしまったわけだが、どんな問題だったのかはやはり気にかかる。同誌を二ヶ月さかのぼってみよう。

『日本一』一巻二号（大正四年十一月一日発行）で出題された問題文は左のとおり。

「懸賞あてのもの 本邦唯一人として海外諸国までも雷名を馳せたる洋画家某画伯は畏くもわが 皇室を始め奉り、万民崇拜の標的たる史実を画材としわが『日本一』新年号口絵の為に数ヶ月以前より齋戒沐浴して其靈筆を揮ひつゝ、あり是れ実に泰西に於けるかの「聖母マリヤ」の大名画にも対比すべき我国古今未曾有の大作にして万金を投ずるも得難き天下の珍宝なるべし本号には故らに「漏らす可らざる神秘」として之を公表せず仍つて若し画伯の名と画材とを的確に判定し得る人あらば願はくはハガキを以て御通知を乞ふ的中者（多ければ抽籤）五名を限り本社発行浮田博士著新道徳論（定価金一円）各一部を呈す（メ切十一月八日）」

どうやらこのクイズは「絵を見せてその作者と画題を当てさせる」というような生易しいものではなかったことがわかる。「二ヶ月後の口絵を誰がどんな画題で描くかをわずかなヒントから当てさせる」という難題である。しかも発行からメ切まではわずかに一週間。『日本一』は創刊間もない雑誌である。果たして十分な応募が集まるのだろうか。

編集部ならずとも心配なところである

が、翌月号の記事(注5)は二、九一一名の応募があったことを伝えている。この数字が多いのか少ないのかはよくわからないが、まずは企画として成立したように思われた――。

しかし、ことはそううまくは運ばない。この記事をさらによく読んでみよう。

〔前略〕応募された方は、総数二千九百十一名の多きに達しましたが、其の大部分は、画材及び画伯名共其的を外れ、画材のみを言ひ当てられた方が、千九十七名でありました。然るに其の画伯名に至つては、遺憾ながら一名も正中された方がありませんでした。(前注5)

たしかに難問ではあったが、まさか一人も正解者が出ないとは『日本一』にとつても誤算であつたらう。編集部はこの一巻三号に川村清雄の短い評伝(注6)を載せるとともに、「前号に於て諸君が最も苦心された画伯名は、本紙第三号の記事を、悉く精読される方には、訳もなく首肯され得ることと信じます」(前注5)なるあからさまなヒントを与えて再募集をかけることになった。

そして次号。《天の石屋戸の図》の図版と作者川村清雄が紹介される(浅子さんはこれを発見したわけである)。クイズの方は四、三七九名の応募を得て、画家名の誤答はゼロ。無事に五名の当選者を選出して企画は終了した(前注4)。

この顛末をみるに、どうやら大正初期の

清雄は、一般にはほとんど知られていなかったようだ。

それも無理はない。なにしろこの時期の清雄には、公衆に自作を披露する場がなかったのである。長らく発表の場であった美術団体・巴会も休止し、個人的な受注作品の制作をこなす、知る人ぞ知る画家となっていた。

むしろこの時期の清雄と一般社会を結んでいたのは装釘の仕事であつた。至誠堂刊行の「大正名著文庫」のシリーズでは、和田垣謙三『兎糞録』(大正二年)、同『吐雲録』、幸田露伴『洗心録』(大正三年)、森鷗外『妄人妄語』(大正四年)といった著名作家の装釘を手掛けている。

また、清雄やその親友・和田垣謙三は、大酒飲みで借金まみれの奇人変人としてゴシップ欄を飾っていた。この和田垣謙三、一面では学者・エッセイストとして著名な文化人であり、『日本一』の評議員に名を連ねているのである。和田垣と清雄の交友関係にめざとく気づいた読者がいれば、あるいは正解にたどり着けたかもしれない。

ともあれ、総合雑誌『日本一』の読者のうちには、「本邦唯一人として海外諸国までも雷名を馳せたる洋画家某画伯」との文言から川村清雄に思い至る者はいなかったようだ。このようなお遊びの企画で画家の価値が左右されるわけではなく、そもそも清雄本人はそんなことを気にも掛けなかつ

ただろうが、いささか寂しくもある。

しかしこの探究には続きがある。そう、大正時代の『日本一』読者はいざ知らず、現代の熱心な清雄ファンであるわれわれは知っている。晩年、清雄はふたたび天の石屋戸神話に挑戦し、大作『建国』(昭和四年・オルセー美術館蔵)をものすことを。

実のところ、浅子さんによる《天の石屋戸の図》の発見は、晩年の大作『建国』の成立過程に新たな光を当てるものなのである。これについてはまた機会を改めて論ずることとし、まずはこの小さな口絵の発見を報告して稿を収めたい。

(注1) 創刊号の目次には「理想的社長及店主論」「商略以て世界の覇者たれ」といった実業記事、「神尾式直覚的暗算法」「落語鑑鈍屋」といった実用・娯楽記事、「日本一の温泉投票」「懸賞読者文芸」といった読者参加記事など、さまざまな記事が並んでいる。

(注2) 作品名はとくに定められていないようだ。同号だけでも『石窟開』『天照大神の天石屋戸隠の図』『天祖天照大神の天岩窟開き』とまことに呼ばれている。本稿では仮に『天の石屋戸の図』としておこう。

(注3) 「口絵の説明」『日本一』二巻一号、大正五年一月、六四頁。

(注4) 「本号口絵懸賞当選発表」『日本一』二巻一号、大正五年一月、二九八頁。

(注5) 「懸賞あてもの 正月号口絵に就て」『日本一』一巻三号、大正四年十二月、二三三〜二三三頁。

(注6) 丸山博章「日本一の世界一人(一) 美術界の第一人川村画伯」『日本一』一巻三号、大正四年十二月、一三三〜一三六頁。

本の窓

白川昌生

『美術館・動物園・精神科施設』

水声社 二〇一〇年刊行



水声社 2,800円

著者は、留学先のドイツで第一線の現代美術の潮流を吸収し、一九八〇年代以降、東西文化の底流を探る広い視野で、展覧会企画、著述、制作活動を通して、表現の可能性を探っている美術家です。本書では、西洋精神医学を医師中心ではなく患者との相互関係として捉え、病を地域、文化との相関性の中で考えて新しい精神医学観を切り開いたエランベルジェの生き方や行為を、芸術のジャンルに読みかえ、近代社会の中で成立してきた「職業としてのアーティスト」とは別の、芸術活動によって社会的絆を贈与的に形成する「技能的实践化としてのアーティスト」の可能性を探ります。まさに現在進行中の美術の多様な現れについて考えるヒントを与えてくれる一冊です。

(上席学芸員 川谷承子)



これからの美術館によせて

県立美術館インターン 世古智子

現代は、さまざまな分野が利益主義にかたよって、すぐに利益として還元できることのみが成功の判断とされてしまう傾向があります。これは美術の分野においても例外ではないでしょう。そのため、同じような企画・展覧会が日本中で行われているような状況になってはいないでしょうか。多くの人に足を運んでもらい、見てもらうような展覧会を企画することは、美術館運営の重要な観点であることはよくわかりますが、美術館の役割は利益を追求することだけでしょうか。

私は、より一層「独自性」をアピールすることがこれからの美術館にとって重要になると考えています。

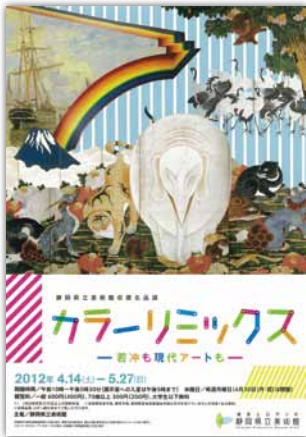
印象に残っている展覧会の一つに二〇一二年四月に開かれた「カラーリミックス」展があります。国内国外、また年代を問わず色をテーマに作品を選出してあり、とても興味深い展覧方法でした。また、これまでに日本美術、西洋美術、現代美術と分類し、それぞれで研究をすることによって、その専門性を高めてきましたが、これからはもう少し美術の縦割りの研究から横の係わり合いに目を向けてはどうでしょうか。例えば、現代美術と日本美術の間には、印象派と日本美術の関係のような深い関係があるにもかかわらず、欧米だけでなく私たち日

本人自身もあまりよく知りません。

このように、一つの時代一つの作家に注目した「個」に焦点を当てた展覧会だけでなく、もつと一元的な、時代や国を超えたアートの見方・考え方を示してくれるような情報を提供してくれる場としての美術館になってくれることを望んでいます。

さらに、有名な作家だけに注目するのではなく、美術館が独自に歴史に埋もれていった地域の作家や作品を掘り起こし研究していくことが求められていると思います。特に富士山が世界遺産に登録されることが決定した今、この静岡という地域とこれまでの美術のかかわりは重要性を増していくでしょう。

静岡県立美術館は自然環境のよさが東京の美術館にはない空間の緩やかさを生みだしてくれています。そして、この独自性の追求が実を結び、文化、芸術の発信地となってくれることを願っています。



「カラーリミックス-若冲も現代アートも」
2012年4月14日～5月27日開催



表紙の作品

《武蔵野図屏風》 紙本金地着色 6曲1双
155.6×356.8 (右隻) / 354.8 (左隻) 江戸時代 (17世紀)
*「富士山の絵画」展 (9/7～10/20) に出品されます。3頁参照。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737

ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp



風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課 / Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課 / Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

ムセイオン静岡・富士山世界文化遺産応援シンフォニー

マウント・カルチャー∞ 名画・山水8つの視点

富士山の世界文化遺産登録を視野にムセイオン静岡が連続講座を開講中です。

7月27日(土) 15:00～17:00

会場 舞台芸術公園「楕円堂」

宮城 聡 舞台芸術センター芸術総監督
ベトナム水上人形劇と「羽衣」

8月24日(土) 15:00～17:00

会場 静岡県立大学小講堂

立田 洋司 静岡県立大学 特任教授
オリンポスとオリエントの聖山

9月28日(土) 15:00～17:00

会場 静岡県立大学小講堂

小針 由紀隆 静岡県立美術館学芸部長
アルプスへの賞賛と批判-18～19世紀の西欧

10月26日(土) 15:00～17:00

会場 舞台芸術公園「楕円堂」

三谷 理華 静岡県立美術館上席学芸員
セザンヌとサント・ヴィクトワール-南フランスの富士山?

詳細については美術館・総務課までお問い合わせください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。